JAPAN SOCIETY FOR INTERIOR STUDIES

JASIS NEWS

NO. 47

2010/8/5

日本インテリア学会会報

■総会を終えて

学会20周年記念事業・その後の展開

学会長　高橋鷹志（東京大学名誉教授）

当学会の設立20周年記念事業として、「学校用家具デザインコンクール」と「コンパクト設計資料集成−インテリア編」を実施してきました。前者については藤村盛造審査委員長からの報告を参照下さい。91点にものぼる応募作品があり、この企画は成功したと思われます。しかし委員長の講評にもあるように、質の高く、斬新な提案が少なかったことが残念でした。私個人としては、かねてよりその重要性を主張していた「二人用の机・椅子」の提案が一点しかなかったことが驚きです。コンペ後に書棚にあるノイフェルトの「建築設計大事典」を開いて一驚したのです。学校の机・椅子の頁を開いてみると、掲載されている家具は全て二人用の机・椅子であったのです。会員の方々もぜひ一度御覧になると良いと思われます。

以上の次第で、このコンペを再度行うことも必要かと思われるのです。アイデアコンペ方式として、家具の専門家だけでなく、学校の先生方にも応募を呼びかけることも考えられます。

一方コンパクト建築設計資料集成インテリア編は原稿も出揃い、秋の刊行に向けて出版社（丸善）で作業が進められています。全体で220頁程の頁数になる予定です。完成版を早く見たいと期待を膨らませているところです。

以上二つの事業が終了した後の当学会の行く手は如何なるものであろうか。次の総会時に、この問題を議論したいので会員各位のお考えをまとめておいて下されば幸いです。この点について私見を述べると、インテリアは、当然のことながら住居を対象にしたデザインやその考え方が主体であったのではないであろうか。今後は住宅のインテリアから外に出た公共空間のデザインを対象にしてはどうであろうか。公共空間とは道路・広場・公園などを意味するが、外部空間を形成するものとして、住宅やその他の建築の外部仕様もインテリアの構成要素として考察の対象に加えねばならない。個人住宅を設計するとき、その施主や設計者はこのことをどの程度理解しているのであろうか。

外部のオープンスペースとは別に、人々が日常的に利用する施設として、区役所・病院（医院）・郵便局・図書館・銀行・スーパー（商店）・飲食店・駅などのインテリアも考察の対象となると思われます。そうした一時的利用施設だけでなく、我々が子どもから大人になるプロセスの中で、生活・行動する教育施設や事務所などのインテリアの再評価も必要となり、さらに進んでそれらのインテリアの国際比較も大きな課題です。

以上、私見を述べましたが、この問題について議論の場を持ちたいと思います。

■2010年度総会について

白石光昭（千葉工業大学）

□平成22年度
日本インテリア学会 総会 議事録

日　時：平成22年６月５日（土）13:30〜14:30

会　場：千葉工業大学津田沼校舎７号館１階
配布資料：平成22年度日本インテリア学会総会資料
（４ページ）

議　事：
１．開会宣言（白石光昭総務委員）
２．会長の挨拶（高橋鷹志会長）
・事前の理事・評議員会において議論された内容を踏まえてこの総会で学会の活動を報告する。
・小原二郎名誉会長の手紙から近況報告。
３．定足数の確認（白石総務担当）
・正会員数461名のうち、委任状97名、出席者数30名で、総会成立に必要な定足数（正会員461名の１／４以上116名）を満たしていることが確認された。（会則15条）
４．議長団の選出（白石）
・議長：直井英雄、書記：松崎元、議事録署名人：若井正一、建部謙治が選出された。
５．第１号議案：平成21年度 事業報告および決算報告（案）の件（上野義雪）
・上野総務委員長より、平成21年度の事業報告および決算報告（案）の説明がなされた。
・５月中旬に行なった日本学術会議への登録申請について目的と効果が説明された。
・西出事務局長により監事からの監査報告書が読み上げられ、平成21年度の決算報告（案）について、資料の通り異議なく承認された。
６．第２号議案：平成22年度 事業計画（案）および予算（案）の件（上野）
・上野総務委員長より、平成22年度の事業計画（案）および予算（案）の説明があり、資料の通り異議なく承認された。
・**資料１訂正：学会設立~~60~~ 20周年（Ｐ２上段）**
７．その他の報告事項
１）平成22年度日本インテリア学会今年度の大会（大阪樟蔭女子大学：郷力実行委員長）準備進捗状況の報告（片山勢津子・京都女子大）
・小宮支部長の代理で片山委員より開催概要の説明がなされた。
・10月23日（土）～24日（日）に大阪樟蔭女子大学で開催する。
・23日（土）午後に見学会、懇親会、24日（日）研究発表、記念講演、23,24日に卒業作品展を開催する。
・講演会のテーマは、「大阪文化とインテリア」（京都大学大学院：高田教授）を検討している。
２）AIDIA2010報告（加藤力国際委員長）
・第６回AIDIA大会は、日本において開催の予定であったが、中国の強い希望により中国において開催することになった。
・中国の意向によりAIDIA事務局を中国に設置することが承認された。
・中国の提案により、今回の大会からAIDIAの参加国としてフィリピンとマレーシアを加えることが提案され、承認された。
・鈴木敏彦担当委員（工学院大）が、加藤委員長の代理で、AIDIAゼネラルアセンブリ及びオープニングセレモニーに出席したので、事後に別途報告する。
３）関東支部見学会報告（岡田悟・共立女子短大）
・関東支部の岡田支部長より、「オカムラいすの博物館」見学会の案内があった。
４）学校家具コンクールの審査結果報告（白石）
・７社による協賛と、日本オフィス家具協会、近代家具出版社による後援を得られた。
・最優秀賞の該当作品はないが、優秀賞を増やした。（優秀賞６点、佳作２点）
・高校生の作品１点を「奨励賞」として選定した。
・今後は入賞者への報告と、大阪大会において入賞作品等の展示を行う予定である。

□総会シンポジウム記録

今年度のシンポジウムは、創設20周年記念事業学校教室用家具デザインコンクールに関連したテーマを設定した。すなわち、「学校教育と家具」と題し、藤村盛造先生（デザインオフィスF&F）、高橋鷹志先生（日本インテリア学会会長）、井上昇先生（いのうえアソシエイツ）の３人の方から、これまでの各先生の活動をもとに得た知識や経験談をもとにご講演いただいた。以下に概要をまとめた（講演順）。

１）藤村盛造先生

学校用家具のJIS改正の委員長や学校の教室のデザインを行った経験から、学校用の良い家具がないこと、それは学校用家具のデザイナーがいないこととの問題意識を持っている。その根底には、価格があまりにも低いことがあり、そのために企業が参入してこないといった問題もあると考えている。そのような状況の中、日本インテリア学会が主催した今回のデザインコンクールは非常に意義あるものと認識しており、ぜひ継続してもらいたいと述べられた。

審査結果の発表の前に、まず審査方法について説明がなされた。審査の結果、最優秀賞は該当作品なしとなり、これは、製品としては品質や強度の面から満足できないと審査委員会であがっていたことがあげられる。なお、最優秀賞がなくなったが、その代わりに優秀賞を追加することとなった。また、高校生からの応募も多数あり、今後の活躍を期待して、奨励賞を設けた説明がなされた。これらの結果は別記のとおりである。

２）高橋鷹志先生

現在の学校教室用家具は１人用がほとんどであるが、当時は２人用が多かったようである。明治時代の資料をいくつか紹介され、検証された。また、ノイフェルトが作成した建築資料集成には、学校用家具には２人用しか掲載されていなかったことも確認されていた。

「２人用」の良い点を考えてみると、隣の子への気配りや思いやり等、現在ではあまり教育されないことに気がつくのではないだろうかと考えていると述べられた。以上のような考察から、今後の家具の一つの方向性として、「２人用」をキーワードとして提案したいと述べられた。

３）井上昇先生

現在の学校教室用家具を紹介され、問題点を指摘された。機能的には大きな問題はないが、デザイン的な面は満足されていない。その原因の一つは販売価格であり、旨みのあるビジネスができない価格設定であると述べられた。一方、オフィス用の家具の歴史を踏まえれば、メーカーにはすでに技術的なノウハウが相当あることから、応用できる下地は整っているはずであるとも述べられた。

日本のこのような状況に対し、ご自身の海外生活の経験から、海外では学校教育の考え方が根本的に異なり、その結果家具も教育に適したものが自由に選択されていたとのことであった。

４）討議

複数の方から質問や意見が出され、充実した討議ができたと思われる。中心的な内容は、普及期と成熟期におけるJISの役割の違い、教育の在り方と家具との関係であり、どちらも今後十分な検討が必要であり、それをもとに新たな家具の提案が必要になるであろうといったことであった。

□学校教室用家具
デザインコンクールの概要

本学会創設20周年記念事業として、昨年の12月に応募要領を公表し、平成22年の２月～３月に募集を行った。

募集対象は会員のみでなく、一般の方にも広げた。これは、インテリア学会の存在をPRしたいことや学校用家具への認識を高めたいとの希望が理由としてあった。この結果、応募総数は91点に及び、コンクール実施の成果はあったものと実行委員会では考えている。

また、株式会社岡村製作所、株式会社カンディハウス、共栄興業株式会社、コクヨファニチャー株式会社、スガツネ工業株式会社、株式会社ホウトク、プラス株式会社にはご協賛を頂き、社団法人日本オフィス家具協会、株式会社近代家具出版にはご後援を頂いた。御礼を申し上げる。

さて、審査結果であるが、最優秀賞の該当作品はなしとなった。このため、最優秀賞の代わりに優秀賞を４点追加し、６点とすることが審査会で決定された。また、佳作は応募要領通り２点である。なお、高校生からの応募も数多くあったため、今後の活躍を期待して、応募要領にはなかった奨励賞を設置することが審査会で決まり、１点が選ばれた。結果は次の表のとおりである（敬称略）。

今回初めて実施したコンクールであったため、不慣れな点も多く、応募者や審査委員の方々にご迷惑をおかけした。実行委員会としてお詫び申し上げるとともに、多くの方のご協力に感謝したい。

審査結果発表

優秀賞	石井　聖己	京都工芸繊維大学大学院　デザイン科学専攻
優秀賞	榎本　文夫	有）榎本文夫アトリエ、駒沢女子大学空間造形学科
優秀賞	中井　敏之 長濱　　浩	ナカイアーキテクツ＋スペースラブ
優秀賞	南　　政宏	滋賀県立大学　人間文化学部
優秀賞	三澤　直也	武蔵野美術大学　インテリア研究室
優秀賞	堀口善太郎	千葉工業大学
佳　作	吉野　崇裕	YOSHINO DESIGN FUSION
佳　作	山口　幸宏	プラス株式会社
奨励賞	余川　　郁	都立工芸高校

■日本インテリア学会第21回大会　第2報

大会実行委員長　棒田邦夫（金沢学院大学）

第１報での大会概要に続き、第２報では大会の収支および役員について掲載させていただきます。

今大会は、前回の第９回大会とほぼ同額の収支でした。当初は景気の影響もあり前回ほどの協賛金を集められないのではないかという懸念もありましたが、本部よりの交付金の増額と前回に近い県・市の助成金、雑収入があり、協賛金は前回の50％集金でまかなえることができました。詳細は下記のとおりです。

なお、大会にご協力いただきました皆様には心より感謝いたします。

第21回大会収支

A　収入

大会運営費（本部交付金）	500,000円
石川県助成金	150,000円
金沢市助成金	140,000円
大会参加費	216,000円

昼食弁当代金	98,000円
見学会費	88,000円
懇親会費	487,000円
プログラム広告協賛金	677,149円
雑収入	231,000円
合計	2,587,149円

B　支出

シンポジウム講演費	110,000円
懇親会費	899,207円
見学会費	65,010円
謝礼金	40,000円
印刷費	177,552円
消耗品費	102,300円
昼食弁当代金	109,725円
アルバイト費	205,000円
大会事務局運営費	300,000円
大会参加費（本部返金分）	216,000円
通信費	24,920円
会議費	134,585円
アトラクション謝礼金	119,700円
返金（年会費３名、懇親会費１名）	38,000円
雑費（振込手数料等）	45,150円
合計	2,587,149円

大会役員一覧
日本インテリア学会第21回大会実行委員会
大会長：山口征三
実行委員長：棒田邦夫
副実行委員長：長山信一、角谷　修
幹事：小松喨一、宮下孝晴、村上章彦
委員：高屋喜久子、河内久美子、浅野成昭、飯尾　豊、尾崎知恵子、佐伯高基、内藤裕孝、吉村寿博　下村滋美、高橋未樹子、三納芙美加

■ AIDIA 中国大会

・第６回AIDIA大会は、日本において開催の予定であったが、中国の強い希望により中国において開催することになった。
・中国の意向によりAIDIA事務局を中国に設置することが承認された。
・中国の提案により、今回の大会からAIDIAの参加国としてフィリピンとマレーシアを加えることが提案され、承認された。
・今年度のAIDIA会議には、加藤国際委員長の代理で、鈴木敏彦担当委員（工学院大学建築学科教授）が参加しており、次項にその報告を掲載する

□AIDIA会議に参加して

鈴木敏彦（工学院大学建築学科）

７月23日（金）～25日（日）、中国の南寧（ナンニン）にて第６回目のアジアインテリアデザイン国際会議が開催された。私は宝塚大学の加藤先生に代わり、急遽日本代表としての参加となった。工学院大学の修士の学生、三平、長谷川、高田の３名と、ATELIER OPAパートナーの杉原、そして京都精華大学の安藤先生の計６名が今回の日本からの参加者である。結論から言うと、加盟国が増えてAIDIAはますます勢いを増している。今後、日本の積極的なコミットが求められていると痛感した。以下に南寧三日間の内容をレポートする。

１）カクテルレセプション
初日の夕方、広西民族博物館にてカクテルレセプションが開催された。参加者はレセプションの前に博物館内を見学することが出来た。３階建ての広大な展示室には、広西省の少数民族の生活様式が等身大の模型や刺繍入りの衣装等で綿密に再現されていた。なかでも、古来の広西省では権威の象徴となったという銅鼓の出土品の数々には圧倒された。ひとしきり見学を終えると、１階のロビーにて第６回AIDIA大会のオープニングセレモニーが始まった。ステージでは少数民族の舞踏や歌が披露され、それを円形の客席から数百名が見守るかたちである。興が乗ったところで、CIID（中国）の代表や前要職者達の挨拶に始まり、KIID（韓国）、JASIS（日本）も開催の祝辞を述べた。本年は設立10周年という節目に、MSID（マレーシア）とTIDA（タイ）、PIID（フィリピン）という３つの新加盟国を向かえ、３段のケーキカットとシャンパンタワーのセレモニーを交えた、結婚式さながらの華やかな前夜祭となった。

２）ジェネラルアセンブリ・キーノート発表・ポスターセッション
二日目は朝８時からジェネラルアセンブリが開かれた。国際会議場の一室にて各国代表が集い、意見を述べ合う形になった。とはいえ、大半はCIID（中国）が声明文を中国語と英語で読み上げるのみに費やされた。これに対しKIID（韓国）が「予め議題を知らせてくれれば、ここで皆が意見を言えた。こんな導入では新加入国は経緯が分からず意見が言えないだろう」と釘を指し、マレーシアとタイに同意を求めて緊張感が走るシーンもあった。日本としては、新加盟国を歓迎すると共に、日本のJASISに持ち帰る議事録のレターが欲しい旨を伝えた。最後には記念写真を撮影して和やかに終わったものの、中国と韓国の主導権争いが印象に残った。

声明内容を要約すると、

CIIDが開催国になって以来、AIDIAの将来の方向性を考えている。／組織の運営方法を改善する必要がある。／昨年の北京での会議より、AIDIAの事務局を中国CIIDに設置することになり責任の重さを感じている。／アジアインテリアデザイン賞のプロセスにはとても慎重に臨んだ。／同様のプロの展覧会やプロもしくは学生向けの展示会やコンペを、将来的にも続けて実施したい。／応募者の国別状況表（後述）／本会議後は、AIDIAは第６回論文集の原稿の選定、編集、出版に焦点を移す。〆切は８月末。10月に編集して出版し、年度末までに学会組織および個人に論文集を届ける予定である。／ AIDIA作品集は、アジアインテリアデザイン賞＋学生作品＋その他の選ばれたプロジェクトが３分冊で出版される。１分冊ずつの配布はしない。／来年度野活動計画は、アジアインテリアデザインコンペの開催、学生のワークショップと教育的セミナーの開催、そしてAIDIA憲章の修正である。以上が配布資料の抄訳。また、この後口頭で、各国の事務局にAIDIA専属の事務担当者を２人以上配置することが提案され、これについて韓国側から前述したとおり、会議の進行方法に異議が唱えられた。

その後、会議場の２階ロビーに移動して、主催者であるCIIDとスポンサー各社のスピーチ、テープカットを交えてオープニングセレモニーが行われた。昼食をはさみ、午後は会議場にてキーノートセッションの発表が行われた。中国の超高層ビルによる都市計画や、韓国がザハ・ハディドと組んだ最新設計案の報告に次ぎ、日本からは京都精華大学の安藤眞吾先生が日本インテリアデザイナー協会の活動内容を講演した。安藤先生のスピーチは、会議に招聘されていた九州大学のZHAO SHICHEN先生（都市・建築学部門准教授）が中国語に通訳した。学生のポスターセッション会場にも多くの人が立ち寄り、熱心に細部を眺めていた。表１に会議で配布された国別参加数を示す。日本からは私の研究室の大学院生(工学院大学、首都大学東京の２校)、計６案の出展のみであった。

表１　学生展国別参加数

中国	８校20案
韓国	６校18案
日本	２校６案
フィリピン	０
マレーシア	７校18案
タイ	７校21案
合計	30校83案

３）各セッションとデザイン賞表彰式

三日目午前は、教育とインテリアデザインの主題別に二室に分かれて発表があった。私はインテリアデザインの会議場で自身のテーマである「建築の機能を併せもつ家具／建築家具」について発表した。興味深かったのは、私を含め多くの講演者に「それはお金持ちのための設計なのか、それとも普通の人々のためなのか」という質疑が出ていたことである。午後のセッションは、「台風が接近しているため、晴天のうちに観光に出かけてほしい」という事務局のはからいで急遽中止となった。夜、再び会議場にて「アジアインテリアデザイン賞」の表彰が行われた。これはAIDIAの発足10周年を記念して今年初めて開催されたコンペである。表２に国別の参加数を示す。日本の１案は、CIIDより求められて私が応募したものである。大賞は該当なしで、銀賞は韓国、銅賞は中国とタイの数案が表彰された。

表２　アジアインテリアデザイン賞国別参加数

中国	41案
韓国	18案
日本	１案
フィリピン	１案
マレーシア	０案
タイ	３案
合計	54案

４）参加した所感

国際会議に参加するたび、デザインや研究に境界は無く、学生の好奇心に国境は無いと思い知る。初の海外出張を経験した学生たちも、語学の重要性と共にアジア市場を見据えたデザインスケールの大きさに開眼していた。アジアの一員として会議を通じ、成果を共に共有できることは非常に喜ばしいことである。一方で、国際会議運営の大変さと各国から持続して参加する重要性を痛感した。ここ数年、日本の参加は少人数にとどまり、AIDIAにおける発言数も韓国と中国が大半を占めている。創設国の一つであるにも関わらず、日本の存在が軽んじられているのが現状である。今回、韓国チームは英語のみならず中国語の通訳も用意して会議に臨んでいた。新加盟国のマレーシアやタイが控えめに英語で発言するのと対照的に、会議の流れを引き寄せようとする勢いであった。フィリピンは北京の会議には参加したが、今回欠席している。「不参加の理由の一つには経済的な問題がある」と中国側事務局は伝えた。各国が一堂に会する機会に参加を逸すると、その国の組織のモチベーションさえ疑われてしまう。日本宛てには、「今後は今以上にメール、電話を通じて、意思の疎通を迅速に行いたい」とのメッセージを預かった。しっかりと対応しようと思えば、英語、中国語、韓国語に堪能な人材をJASISの布陣に加えることが必須であろう。

■第22回インテリア学会大会の概要

担　当：関西支部／大会実行委員会
大会長：小宮容一（芦屋大学）
委員長：郷力憲治（大阪樟蔭女子大学）
会　場：大阪樟蔭女子大学
（大阪府東大阪市菱屋西４－２-26）
日　時：2010年10月23日（土）、24日（日）

概　　要
■見学会：23日（土）
定　員：45名
見学料：￥2,000
時　間：13：00（現地集合）-17：00
（バスにより懇親会場へ移動）
場　所：
□大阪樟蔭女子大学　樟徳館　（登録有形文化財、東大阪市菱屋西４－２-12）
昭和初期に建築された学園創始者の私邸
□鴻池新田会所（国史跡・重要文化財、東大阪市鴻池元町２-30）
江戸時代に豪商鴻池家が新田の管理・運営をおこなった施設
□住まいのミュージアム・大阪くらしの今昔館　（大阪市北区天神橋６－４-20）
江戸時代から現代までの住いと暮らしを再現した体験型ミュージアム

■懇親会：23日（土）
場　所：シティープラザ大阪
（大阪市中央区本町橋２-31）
時　間：18：00-20：00
会　費：￥7,000
＊見学会参加者はバスにて送迎
＊堺筋本町駅より徒歩10分、特別価格での宿泊を確保

■卒業制作展：23日（土）24日（日）大阪樟蔭女子大学記念館（登録有形文化財）１階

■研究発表：24日（日）
10:00-12:00．14:00-17:00　教室３室＋記念館

■講演会：24日（日）円形ホール、12：50-13：50
講　師：高田光雄（京都大学大学院教授）
テーマ：「大阪文化とインテリア」（仮題）

■平成22年度運営委員会だより

□総務委員会

幹事　白石光昭

今年度の総会は６月５日（土）午後１時より、千葉工業大学において開催され、平成21年度の活動報告並びに決算、平成22年度の活動計画、予算案に関する議案の承認を得ることができた。しかし、当学会の諸活動には多くの課題と検討事項があり、学会活動が活性化するよう、定期的な総務委員会の開催と、各支部・各部会・各委員会のサポートを考えている。学会全体の継続的な課題として、正会員数（特に若手会員）や賛助会員数の増加、会員相互のコミュニケーションの活性化等があげられ、これらを中心的な課題として取り組んでいく予定である。

また、昨年度募集した学会創設20周年記念事業学校教室用家具デザインコンクールの公表、大会での表彰式を実施し、事業を総括していきたい。

□広報委員会

委員長　湯本長伯

１）事務ホームページの更新を行った。皆様の情報提供を、引き続きお願いします。
第22回大会の最新情報が掲載されており、大会専用ホームページへのリンクも張られています。
ご活用をお願い致します。専用ＨＰは下記
http://www.jasis-kansai.jp/jasis_22th/index.html
また学会ホームページのＵＲＬは、下記
http://design.kyushu-u.ac.jp/~ymtlab/JASIS/

２）広報委員会では、インテリア学会メールニュースの発行を続けています。
現在は、第0037号＜2010.05.30＞まで発行し、過去のニュースはホームページからすべて見ることができます。
最も早く会員の皆様に、重要な情報をお知らせする貴重な手段ですので、皆様の一層のアドレス登録を、お願い致します。
http://design.kyushu-u.ac.jp/~ymtlab/JASIS/mailnews.html

３）会報発行を行いました。総会後直ぐには発行出来ませんでしたが、記録を中心に秋の大会情報も含め、種々の情報をお届け致します。
過去の会報も、ホームページから見ることができま

す。ご活用下さい。
http://design.kyushu-u.ac.jp/~ymtlab/JASIS/47.pdf

□国際委員会

委員長　加藤　力

AIDIA関係の情報が、総会およびAIDIAのページにあります。

□論文審査委員会

委員長　直井英雄

「日本インテリ学会論文報告集20号」ですが、またも年度をまたいでしまって申し訳ありませんでしたが、すでに発行され、皆様の手元に届いていることと思います。本号の論文数は８編で、ここ数年10編前後の論文が集まっているのは喜ばしい限りです。

次に、「International Journal of Spatial Design and Research（旧AIDIA Journal）」の10号についての報告ですが、本年も幸い数編の応募論文が寄せられ、現在、国内審査を進めております。審査済み論文は７月初めに中国に送ります。発行は秋ごろになるものと思われます。

ところで、改めていうまでもないのですが、最近、大学を初めとする研究教育機関では、何事においても研究実績が求められます。本学会の関係では、上記の二つがその実績づくりの場となっているわけですが、なにせ両方とも１年に１回のチャンスですので、その気のある方々は、タイミングを失することなく応募されることをおすすめします（もちろん、どの程度の実績と評価されるかは各機関によりますが）。論文応募の締め切りその他は、ともに本年の日程と変わらないものとお考えください。

■平成22年度支部だより

□北海道支部

小林　謙　支部長

今回はありません

□東北支部

若井正一　支部長（日本大学）

５月29日（土）午後３時30分より支部総会、第５回研究報告会を日本大学工学部（郡山市）で開催しました。なお、本年中に東北支部の事務局は、東北芸術工科大学（山形市）に移すことが決まりました。

以下に、第５回研究報告会で発表された６題のタイトルと発表者を掲載します。

記

・ゆか座の生活姿勢と身体支持条件に関する人間工学的研究（正座用椅子の座りやすさ実験について）
平林卓朗（日大大学院）
・住まいにおける家族の居場所に関する一考察（家族の続柄からみた専用部屋や机の有無について）
木下勇太郎（日大大学院）
・住居併用型「民宿」の生活実態に関する一考察（福島県南会津郡旧舘岩村に立地する民宿について）
星ルミ子（日大大学院）
・ペルーにおける学校教育制度と学校建築に関する一考察（リマ市内のサンペドロ学校の建築設計について）
五島デニセ（日大大学院）
・熱帯魚とともに暮らす家（住まいのインテリアコーディネーションコンテス2010・入賞作品）
北井仁志（日大大学院研究生）
・地域コミュニティの場としての蔵の活用とインテリア空間　～作品～
早野由美恵（東北芸術工科大学）

研究報告会終了後、発表者を囲んで郡山市内の割烹で懇親交流会が開催された。

□北陸支部

棒田邦夫　支部長（金沢学院大学）

日本インテリア学会第21回大会　第２報として掲載しております。

□関東支部

岡田　悟　支部長（共立女子短期大学）

関東支部の今年度の活動を報告します。

１）オカムラいすの博物館見学会

「いすをプロトタイプに応じて三次元で評価できる」と評判のエルゴノミック・シーティング・シミュレータを体験し、シミュレータ開発担当の方の講演と博物館見学とを通じて、椅子の科学と産業史、技術史への理解を深めました。

日時：６月26日（土）受付13: 00～終了16:00
会場：オカムラいすの博物館
（千代田区永田町 ２-13- ２）
内容：13：30～14：00
講演「シミュレータ開発の経緯」

浅田晴之氏（(株)岡村製作所オフィス研究所）
14：00〜15：30　シミュレータ体験と博物館見学
15：30〜16：00　質疑
２）11月頃、見学・講演会を開催予定
（内容調整中）
３）支部ニュース12号発行予定

□東海支部

建部謙治　支部長（愛知工業大学）

東海支部総会は、この会報の原稿の提出直後の６月26日（土）に開催される。総会前には、第２代尾張藩主徳川光友が、父である第１代藩主徳川義直の菩提を弔うために建立した徳興山建中寺の見学を実施する。建中寺は浄土宗の寺院で、江戸時代を通じて代々の尾張藩主の廟が置かれていたもので、本堂、御霊屋、経蔵、山門について、名古屋工業大学の河田教授（東海支部副支部長）の案内と解説がある。

総会では、平成21年度の事業報告および収支決算書と、平成22年度の事業計画および予算計画が審議されることになる。この後、会場を移して懇親会が開催される予定である。

なお、昨年度は支部開設20周年の節目に当たり、記念事業として９月に中国上海・蘇州の庭園建築の視察旅行を行った。参加者は13名であった。引き続き、視察旅行の報告会を、ＴＯＴＯマルチスペースで開催し、40数名の参加者があった。近日中にこれらを報告書としてまとめ記念誌として発行する予定である。　また、特筆すべきことはインテリア５団体による連絡会で、開催回数が30回を数える。新年の互例会とともに、年２回のペースでリレーセミナー（講演会）を開催している。第６回は４月２日に開催され、瀬戸昇氏（AD　COREクリエイティブ・ディレクター）による「LA住宅/建築+ADCOREカタログ撮影の手法とその建築」の講演があり、盛況であった。

また、インテリア連絡会に関連して、インテリア・建築の専門家の有志による学校建築の快適構想委員会がある。これは、社会貢献活動の一環と位置付けられるもので、既存の小・中学校建築の問題点を調査し、子どもたちの生活・学習空間としてふさわしい環境を考え改善案を学校や教育委員会に提案する活動で、名古屋市内のモデル校でその活動が始まろうとしている。

□関西支部

小宮容一　支部長（芦屋大学）

現在、支部活動は、第22回大会実行委員会として、大会準備に追われています。定期的に月１回の全体会議と個々の担当部分は個々に動いてもらっています。６月９日には大会第２報の纏めの会議を持ちました。早ければ７月初めに会員のお手元に届けられるように進めています。本会報紙の別ページに大会の概要を記載しましたので、ご覧下さり、発表と参加の準備を、よろしくお願いいたします。さて、６月５日の学会総会を受けて、支部の評議委員会を７月22日開催、その後引き続き実行委員会を行いました。５月、６月はデザイン関係の学会や協会総会が多く有り、招待を受けたり、自らも会員であったりで、総会・懇親会に参加機会の多い時期でした。各会、少しずつ若返りもあり、活動も活発化の方向にある様に思われました。

□中国・四国支部

大森豊裕　支部長（近畿大学）

平成22年度総会等の開催案内
１．定例総会
・総会
日時：平成22年６月12日（土）12：30〜
場所：広島県健康福祉センター
総会講演会　15：30〜17：00
講演者：灰山 彰好
演題：「都市のインテリア／Ｃ．アレクザンダーが記した小さな、偉大な一歩」
質問の長い講演会という趣旨で、参加者の方々と共に考えたいと思っています。
２．ミニレクチャー№15
講演者：西村正弘　氏（N　D esign）
日　時：９月中旬　（予定）
場　所：近畿大学工学部
演　題：「模型制作の実際」

□九州支部

車　政弘　支部長（九州産業大学）

今回はありません

■研究部会だより

□歴史部会

幹事：河田克博（名古屋工大）

今回はありません。

□デザイン部会

佐戸川清　部会長（㈱ゼロファーストデザイン）

今回はありません
部会メールニュースを、随時発行しております

□計画・構法部会

栗山正也　部会長（ＫＤアトリエ）

今回はありません
研究協議会関係の報告が、別記事にあります

□人間工学部会

白石光昭　部会長（千葉工業大学）

平成22年度の活動としては、年度末の３月月26日（金）にフランスベッド株式会社様のご厚意により東京工場の見学会を開催した。参加者は16名でした。毎年、関東での実施にも関わらず、遠方からの参加者もおられ、大変ありがたいことと考えております。

ただし、ここのところ見学会が中心となり、研究会中心の集まりができずに、忸怩たる思いもあります。しかし、何らかの活動を皆さんにお伝えしたいとの立場で実施しておりますので、遠方でもお時間が取れる場合はぜひご参加いただきたいと思います。

今年度の計画はまだ確定しておりませんが、やはり従来通り見学会と研究会を合わせて行いたいと思います。また、学生の方が参加できるような企画とし、今後の人間工学関連の研究に関心を持ってもらえるような企画も考えたいと思います。

また、関東以外でも見学会や研究会の企画があればお伝えいただき、広く活動の幅を広げたいとも考えておりますので、ご意見があればご連絡ください。
アドレス：mitsuaki.shiraishi@it-chiba.ac.jp

□教育部会

河村容治　部会長（東横学園短期大学）

今回はありません

□住宅部会

直井英雄　部会長（東京理科大学）

今回はありません。

□ＣＡＤ部会

川島平七郎　部会長（元東横学園短期大学）

今回はありません

□インテリア学大系特別委員会

委員長　湯本長伯（九州大学大学院）

基本的な目次はほぼ出来上がり、この後は関係する部会等と摺り合わせを行い、さらに出版社との相談を進める予定です。と、前号の会報にてお知らせ致しましたが、その後あまり進んでおりませんことを、お詫び申し上げます。

前々号に現段階の目次を掲載致しましたが、残念ながらどなたからも、ご意見を戴けませんでした。下記まで、何でも結構ですので、ご意見をお寄せ下さい。

interior@design.kyushu-u.ac.jp

■H22年度理事会議事録

白石光昭（千葉工業大学）

議事録として確定するには、次の理事会での承認が必要なため、次回の会報に掲載予定です。

■研究協議会（研究部会・特別委員会）・合同会議　報告

協議会幹事　栗山正也（KDアトリエ）

平成21年度第１回理事会で議題とされ、研究協議会での検討を預託された「部会の統廃合」等についての合同会議を以下により開催した。

その結果、今後の部会活性化を図るための組織のあり方・役割等について協議し以下の合意を得た。

１．日時：2010年２月13日（土）・16～19時
２．場所：九州大学有楽町オフィス（千代田区・有楽町ビル606号室）

３．出欠：予定した８部会・委員会のすべてが出席した栗山（計画・構法／協議会幹事）、河田（歴史）、人間工学（白石）、河村（教育）、佐戸川（デザイン）、直井（住宅）、川島（ＣＡＤ）、湯本（大系）

４．議題：

・部会ごとの現状と今後の運営
・研究部会全体の現状と今後の運営
・その他、部会から見た当学会の現状と今後の運営
・研究部会活動の活性化と整理を大きなテーマに、フリーな議論を行う

５．合意事項

⑴　研究協議会の下に、常置の研究部会と時限特別委員会の２種類の組織を置く。常置部会は「全国規模の事業を継続して行う」こととし、時限特別は「特定の事業（プロジェクト）を数年の時限で行って、終了したら解散する」という、それぞれの性格付けを明確にする。

⑵　常置部会の事業は、歴史は「大会時の見学会」、教育は「卒業設計展・巡回展」、人間工学は「家具コンクール」あるいはそれに類する事業を、「継続して行う」こととする。

⑶　時限特別は、「インテリア学大系刊行」、「インテリア製図法基準化」「学校家具コンクール」を取り敢えず事業として立て、今後さらに充実を図る。

⑷　常置部会の中に、「計画・デザイン・事業」部会を設ける。この部会は「計画・デザインを含めた幅広いテーマ研究の公募・助成」「本学会として必要な研究事業の提案や支援」」等を行う。

⑸　研究協議会は研究部会長等の会議とし、必要な場合会議を開催し部会の活性化、助成・支援等について協議する。

【研究協議会・想定組織図】

研究協議会

〇常置部会

・計画・デザイン・事業部会（総合研究・助成・支援事業）
・歴史部会（研究会・大会時見学会事業）
・教育部会（研究会・卒業設計展・巡回展事業）
・人間工学部会（デザインコンクール・見学会・研究会事業）

〇時限特別委員会

・インテリア学大系刊行委員会
・CADインテリア製図法委員会
・学校家具デザインコンクール委員会

※尚、この合意事項については平成21年度第２回理事会において提案したが審議に至らず、決定は次回理事会に持ち越しとなった。

■事務局より

今回はありません

■連載『インテリアの行方』

～社会心理学とインテリア学の融合～

松田奈緒子（京都工芸繊維大学）

「インテリアは閉ざされた空間である。が、しかしそれは、社会とつながっている」。このことに確信を持てるようになったのは、インテリア空間を自己化する過程に、‘他者’の存在が関与するということが分かり始めたからです。

住まいのインテリアには、その部屋に住んでいる人の気持ちや個性、あるいは、感性といったものが反映することは体験的に分かっていました。したがって、そうしたものが、どのように部屋の中に表出されるのかを調べ始めました。しかし、そのうち、そればかりではなく、住み手のもっと奥深くにある‘自己’が滲み出てくることを掴み始めました。

つまり、住み手は、‘他者’との違いや、‘他者’から見られる自分を意識しながら、自分の自己や個性を認識し、自分自身の空間領域を創り上げていくのだ、と考えられます。この意味で、住まいのインテリアとは、外部から遮断され、閉ざされた空間ではありながら、それは、衣服や化粧と同じ様に、他者のまなざしを意識し、感じながら、自己化していく対象である、と言えると思うのです。

したがって、空間の自己化の過程は、インテリア空間と住み手とをより豊かでより良い関係にする上で、個人の自信や自己充足感、あるいは、安心感などの心の問題につながっていくものだと言えるでしょう。

こうしたことから、インテリアの分野にも「社会心理学」的視点の導入が必要だと思い始めました。社会心理学とは、他の人が実際に存在したり、想像の上で存在したり、あるいは、存在をほのめかされることによって、個人の思考、感情、行動などが、どのように影響されるかということを理解し、説明を試みることである、と定義できます。

社会心理学の視点を通した研究領域として、「被服社

会心理学」や「化粧社会心理学」があります。しかしながら、住まいのインテリアを社会心理学的なアプローチから捉えた研究は、部分的に参考になるものはあるものの、現時点ではほとんど見受けられません。そこで、「インテリア社会心理学」という学問領域が成り立つのではないか、と考えました。

実際今日、インテリアの分野は、化粧や被服に次いで、我々の身近な自己表現の手段になっています。インテリアの領域は、その身体的自己表現の拡がりの上に、位置づけられるのです。

こうして見ると、人間を包む空間は、インテリアを起点に、地域コミュニティ、地球環境、宇宙へと広がっていきます。私は、「インテリア社会心理学」という新しい研究領域を通して、インテリアのその先にある存在を見てみたいと思うのです。

—CGでインテリア表現が変わる—

棒田邦夫（金沢学院大学教授）

現在、私はコンピュータグラフィックス（以後CGとする）を主に教授しています。『CG』、インテリアとはかけ離れた世界と感じるかもしれませんが、いまや作品のプレゼンテーションツールとして必ず用いられる道具でもあります。先の学校教室用家具の机といすコンクールの入賞作品を見ても、高校生作品以外はCGを用いたプレゼンテーションボードでした。そこで、このCGによるインテリアの行方について語ります。

コンピュータとの出会いは溯ること20年も前で、最初からCGに入ったわけではなく、はじめはコンピュータなるものの物珍しさと設計製図機としてのCADでした。使っているうちに「すごい」「楽しい」という実感も湧き、次第にドラフターを排除してコンピュータで製図を描くようになりました。当時はまだJW CAD、VectorWorksもなく、単純な線と幾何形態を組み合わせたもので、建築製図というよりは簡単な平面図を描き、そこに家具などの装備品を配置するという、レイアウト要素の強いものでした。そのおかげで短大でのインテリア計画の授業には使いやすく、教える方も教わる方も楽しく遊べる道具でした。この遊べる道具が印刷物のような見栄えのするプレゼンテーションボードに近づいたのが、忘れもしない1989年,90年に発売されたAdobe社のIllustrator、Photoshopでした。前者は自由自在にイラストが描けて、後者は写真の加工ができるソフトウェアで、制作したプレゼンテーションボードに感動さえ覚えました。これまでの手書きのプレゼンテーションボードでもいいのですが、手書きのものだと、どうしても描写技術が要求され、デッサン力のない学生ではプレゼンテーションボードが見劣りしてしまいます。さらに、描写技術が無いばかりに、いいアイデアでも、いいように見られなかったりしたのが、このIllustrator、Photoshopによって描写技術の無い学生でも、見やすく、わかりやすく、きれいで、見栄えのするプレゼンテーションボードに仕上げられることに感謝しました。また、それに連れて大判印刷も低価格でできるようになり、いまでは、どの美術系、デザイン系の大学、学部、学科でもPCとIllustrator、Photoshopと大判プロッターをあたりまえのように使い、よりCGへの依存度が増したようにも思います。これからもこの道具によるプレゼンテーションボードは続いていくでしょう。しかし、一方ではCGでつくられたプレゼンテーションボードがどれも同じように見えたり、デザインの発想幅が狭くなっているように感じることもあります。

ともあれ、最近ではPCの低価格化、大容量、演算スピードUPと進み、プレゼンテーションボードも紙からスクリーンへと替わり、動画、３DCGへと表現の幅が広がっています。これからもCGは品を替え、いろいろなかたちでインテリア表現に活用されていくと思います。でも、どれだけCGが進歩しても、CGがアイデアを生むのではなく、頭で思い描いたアイデアを鉛筆、ペンでスケッチしたものを、CGできれいにまとめるという、道具であってほしいと願っています。

ところが、この願いは、いまiPadなるものの出現によって、崩れようとしています。iPadご存知の方も多いかと思います。ひとことで言うとペンタブレットにモニターが付いたようなもので、PC本体につながなくても、これ１台で絵が描けて、インターネットもできて、写真の加工・編集、書類も作成できるというものです。これまでにもペンタブレットというペンで描くディバイスはありましたが、PCと直結したモニターがなければ使えませんでしたし、紙で絵を描くようなわけにもいきませんでした。それが、指１本で簡単に絵が描けて、簡単に拡大・縮小ができ、さらにＢ５サイズで簡単に持ち歩くことができる大きさなのですから、紙でアイデアスケッチをするという思考は転換しなければならないようです。

実は、私、早々にこのiPadを購入してみました。使ってみて思ったのですが、これまでスケッチブックを抱えて歩いていた学生が、これからはiPadを抱えて歩くのではないだろうかと、それほど心打たれる代物でした。

取り留めのない話に終始しましたが、字数も迫ってきましたので、結びに、コンピュータで絵が描けるようになって25年、インテリアも含めデザインの表現がこの１品で大きく変わるような予感がします。

■ 編集後記

総会後の会報を、お届け致します。１ケ月後の７月発行の予定でしたが、さらに１ケ月遅くなりましたことを、お詫び申し上げます。

総会や大会の記事は、確かに既に終わったことの報告ではありますが、少し経った時点で、記録としての重要性が出て来ると信じて、きちんとした記録の掲載に努力しています。

また記録だけではなく、会員各位の意見交換も学会として大切です。そうした意見交換の場・コラムとして、『インテリアの行方』を連載しています。今号では、永年の努力を実らせて学位を取得された若手の研究者と、金沢大会を責任者として開催して戴いたベテランの教授に、それぞれのインテリアへの想いと考察を述べて戴きました。

このコラムは、当初から会員の皆様に開かれたページですので、ぜひ投稿も戴ければ有難く存じます。

何卒よろしく、お願い申し上げます。

（編集委員：湯本長伯・片山勢津子）

■日本インテリア学会会報第47号（2010.8.20発行）
編集者：湯本長伯、片山勢津子
発行者：高橋鷹志（日本インテリア学会長）
広報委員会：湯本長伯、片山勢津子、渡辺秀俊、若井正一、平井康之、平田圭子、白石光昭

■事務局
日本インテリア学会
事務局長　西出 和彦
〒113-8656　東京都文京区本郷7-3-1
FAX：03-5841-8515